

適切な生徒理解に基づく生徒指導のための一考察

—児童生徒指導ハンドブック 2023 の活用を通して—

カウンセラー研究員 加藤 伸吾 (川崎市立菅中学校)

I 主題設定の理由

1 生徒指導上の今日的課題

令和4年12月に生徒指導提要¹が12年ぶりに改訂された。その理由に、前回の生徒指導提要の作成時から生徒指導をめぐる状況が大きく変化していることが挙げられている。まえがきに、「子供たちの多様化が進み、様々な困難や課題を抱える児童生徒が増える中、学校教育には、子供の発達や教育的ニーズを踏まえつつ、一人一人の可能性を最大限伸ばしていく教育が求められています」とある。

「児童生徒とどのように関わったらよいか」「どのような指導が児童生徒を伸ばすのか」ということは、常に教育現場の教職員にとって頭を悩ますことだが、社会の大きな変化に対応し、適切に生徒指導を行っていくためには、教職員がそれまでの経験などをもとに考えた「した方がよいこと」「すべきこと」ではなく、「生徒指導は児童生徒理解に始まり、児童生徒理解に終わる」という生徒指導提要の言葉にあるように、まずは現在の社会を生きる児童生徒を心理面、学習面、社会面、健康面、進路面、家庭面等様々な面から適切に理解する必要がある。さらに「教職員は児童生徒を十分に理解するとともに、教職員間で指導についての共通理解を図ることが必要です」とあるように、多様化が進み、様々な困難や課題を抱える現状やそれに伴い整理しなおされた指導の考え方やノウハウを教職員全体で共通理解する必要がある。このようなことをすぐに身に付けることは容易ではない。しかも、全体で共通理解を測るのはさらに困難である。こういった状況を打開するためには、生徒理解の基本がまとめられ、指導の拠り所となる教科書のような存在があると良いと考えられるが、生徒指導提要は総論的に理解するには良いものの、教職員一人ひとりが自分のこととして、今日の前にいる生徒たちへの指導を考えていくには、具体的な指導のイメージを持ちにくい部分があるとも感じる。

2 主題設定

表1 1学年 教育相談事前アンケート

現在持ち上がりで中学校第2学年の学級担任を務めているが、昨年度より学年としての課題をいくつか抱えていると感じていた。表1は令和4年6月と11月に全校生徒を対象にした教育相談アンケートの結果である。生徒の気持ちの状態を測るアンケートは、実施する時期や個々の生徒の状況により結果が大きく左右されるため、一義的にとらえることは難しいことを踏まえた上で考察した。

1～4は学校や学級についての質問だが、「2 学級が楽しいムードだ」「3 学級の取組に対し、団結力がある」「4 行事にはまとまって参加し、みんなが燃えた」という質問に対する肯定的な回答の割合は高い

が、「1 学校に行きたいと日々思う」という質問の割合は1～4の中では高くはない数値といえる。同様に「5 自分の意見や気持ちをはっきり言える」「6 思っていることを何でも発言できる」という

令和4年度 1学年 教育相談事前アンケートから一部抜粋

	質 問	6月	11月
1	学校へ行きたいと日々思う	60.8% (71人)	48.6% (56人)
2	学級が楽しいムードだ	95.0% (110人)	86.4% (100人)
3	学級の取組に対し、団結力がある	95.0% (110人)	82.9% (96人)
4	行事にはまとまって参加し、みんなが燃えた	95.8% (111人)	89.2% (103人)
5	自分の意見や気持ちをはっきり言える	76.0% (88人)	71.1% (82人)
6	思っていることを何でも発言できる	70.2% (81人)	61.2% (71人)

¹ 文部科学省『生徒指導提要（改訂版）令和4年12月』2022年

質問の割合も高くはない傾向があったので、それが「1 学校に行きたいと日々思う」に関連している可能性も考えられる。そこで、現在の私たち教員の指導が、適切な生徒理解に基づいた指導になっているかを確認する必要があると考えた。実際、多様化する生徒指導に対して、経験をもとにその都度解決をするような形が多く見られ、指導に統一性がなくなってしまうという問題もあった。

生徒指導提要が改訂された時に感じていたことが現実問題としてアンケートの数値に現れてきているのではないか。適切な生徒理解に基づいた生徒指導が行えるよう、教職員全体で改めて生徒指導について考える必要があるのだが、何か具体的な指導の指針となる教科書のようなものはないか。このようなことを考えていた時にたどり着いたのが、令和5年3月に川崎市教育委員会から発行された「児童生徒指導ハンドブック 2023²」(以下ハンドブック)であった。これは改訂された生徒指導提要の内容を踏まえ、川崎市の人権尊重教育を基盤とする理念に基づき作成されたもので、「児童生徒を取り巻く諸課題の解決に向けて、学校ではどのような指導や支援が必要なのか、どのような対応をすべきなのかを、経験の有無を問わず、どの年齢層であっても、本市の教職員として理解し、実践すべき内容を網羅している」とあるように、「生徒指導提要の川崎市版」とも言える。このハンドブックが、現在私が所属する学年が抱えている課題の解決に大きく寄与すると考えた。

このハンドブックを軸として、適切な生徒理解に基づいた生徒指導を話題とし、その在り方を一緒に考え、具体的な指導計画を立て、一貫した指導に繋げていく。こうすることで、学年の課題も改善できると考え、本研究では研究主題を「適切な生徒理解に基づく生徒指導のための一考察 ―児童生徒指導ハンドブック 2023 の活用を通して―」と設定した。

3 研究の目的

本研究では、生徒が学校に毎日楽しく通えるために、私たち教員が日常的な生徒との関わりの中で実践できることを探り、共有し、生徒への関わり方を見直すきっかけとしたい。こうした目標の実現のために、日常的に、繰り返し、課題が見えるたびにハンドブックを活用し、効果を検証する。

II 研究の内容

1 研究の方法

(1) 調査対象・時期

市内中学校第2学年4学級(在籍124名) 4月から12月

(2) 学年・生徒の実態と課題の把握

①学年・生徒の実態と課題の把握については、定期教育相談事前アンケート(6月、9月)とかわさき共生*共有プログラム効果測定(6月、12月)をもとにした。

(教師の関わりの変化による生徒の気持ちの変容を把握)

②教職員にアンケート調査を実施し、実践したことや意識の変化を見とった。

(3) 実践内容

まず、教職員全体にハンドブックを周知するために、GIGA 端末の Google Classroom と生徒指導担当通信(以下生担通信)を教職員向けに作り活用した。そこから学年・生徒の実態と課題の把握から得た情報をもとに、ハンドブックの中からは4つの章と過去の教育相談研究の中から1つを実践した。

² 川崎市教育委員会『児童生徒指導ハンドブック 2023』2023年

ハンドブック第2章からは、「魅力ある学校づくり」「学校生活の約束やルールを考えてみましょう」、第4章からは「教育相談の年間計画」「定期的な教育相談の実際」「児童生徒が相談しやすい雰囲気づくり」、第13章からは「子どもたちのSOS」「SOSの出し方・受け止め方教育」、ハンドブック第14章からは「児童生徒との良好な関係づくり」「ことばの大切さ」を実践した。また、その他として令和3年度の川崎市総合教育センター教育相談研究³から、授業内における各教科のコミュニケーション活動についても情報を集め発信をした。

2 研究の実践

(1) 実態と課題の把握

①定期教育相談事前アンケート（6月）から

6月に行う定期教育相談の前に、全校生徒を対象に教育相談事前アンケートを行った。昨年度抽出して分析したデータについて、今回も注目し、昨年度との比較と現状の把握に活用し、今後の研究の方向性を定めるための材料とした（表2）。アンケートの結果からは、「3 学級が楽しいムードだ」、「6 学級での取組に対し、団結力がある」、「7 行事にはまとまって参加し、みんなが燃えた」等の設問に対しては9割以上の生徒が肯定的な回答しているのに対し、「1 学校へ行きたいと日々思う」については、昨年度同様肯定的な回答は6割であった。すなわち、学級のムードや行事に取り組む姿勢は肯定的な回答が高い割合を示している反面、学校に対して不安を感じたり、登校が億劫だと感じたりしている生徒も4割程度存在することが想起させられる。

表2 教育相談アンケート（R4・R5）
教育相談事前アンケート 令和4～5年度（一部抜粋）

	質問	R4 6月	R4 11月	R5 6月		質問	R4 6月	R4 11月	R5 6月
1	学校へ行きたいと日々思う	60.8%	48.6%	60.3%	7	行事にはまとまって参加し、みんなが燃えた	95.8%	89.2%	96.5%
2	悩み事を打ち明けられる友達がいる	90.9%	82.9%	89.7%	8	友達に対してお互い注意できる	90.9%	81.9%	89.6%
3	学級が楽しいムードだ	95.0%	86.4%	93.9%	9	自分の意見や気持ちをはっきり言える	76.0%	71.1%	74.1%
4	思っていることを何でも発言できる	70.2%	61.2%	65.5%	10	友達のよいところをたくさん見つけられる	91.7%	85.5%	90.5%
5	学級での話し合いは活発だ	82.6%	73.8%	74.1%	11	友達に思いやりをもって接することができる	96.7%	91.8%	98.3%
6	学級の取組に対し、団結力がある	95.0%	82.9%	96.5%	12	学級の雰囲気や良くなるように努力している	87.6%	86.5%	89.6%

②かわさき共生*共育プログラム 効果測定（6月）から

学級の人間関係の把握や、学級経営の方向性を見極めるために、かわさき共生*共育プログラムの効果測定を行い、定期教育相談アンケートの結果も参考にしながら、クラス及び学年の状況を読み取ることにした。各クラスの集計結果をもとに、それを平均化したところ市標準（50）と比べるとどの項目も上回っていた（表3）。特に感情統制の項目においては市平均を13.0%も上回っていることから、対人関係に気を配ることができる生徒が多いことが分かる。

表3 第2学年6月効果測定結果
令和5年度 効果測定（6月）

	言語的解決スキル	気遣い・サポート	感情統制	信頼他者	信頼自己
A	55.1	56.9	61.9	54.8	59.4
B	52.8	53.9	60.3	55.7	54.2
C	52.8	56.4	64.9	57.3	56.5
D	53.4	57	64.8	55.1	56.5
本校の 平均値	53.5	56.1	63.0	55.7	56.7
昨年度 (R5.1)	53.0	54.9	62.3	54.8	56.0

単位%

³ 荒谷健一「日常的な教育相談活動の充実」令和3年度川崎市総合教育センター研究紀要第35号 p.185

しかしながら、言語的解決スキルが他の項目に比べ僅かではあるが低いことに着目した。言語的解決スキルの項目の7つの質問である、「自分の気持ちや考えなどを素直に話すことができる」などの数値は、前述の教育相談事前アンケート「4 思っていることをなんでも話せる」と共通していて、他の質問や項目に比べて高くはない数値といえる。

感情統制の項目の数値が高いのは、小学校の頃から地域に見守られ、小中とほぼ変わらない友人関係から相互理解が深まった影響も考えられるが、言語的解決スキルが高くないため、自分の思いや伝えたいことを上手く相手に伝えられず、他の低い項目にも影響が出ていることが考えられる（図1）。

また、自分や友人を信頼することによる相互理解の深まりが、言語的解決スキルを高めることにつながると考えた。これらを深めるためには、生徒に対して言語解決スキルを身に付ける手立ても考えながら、教育活動の様々な場面で実践すべき項目であると考えた。

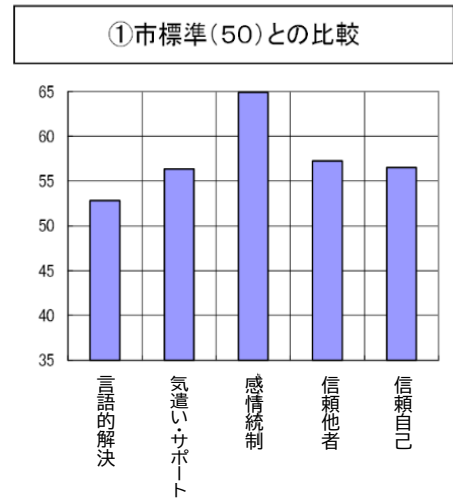


図1 効果測定の結果

(2) 実践内容

①ハンドブックの周知

ア GIGA 端末の Google Classroom の活用

ハンドブックを活用するにあたって、普及のために教育相談専用の Classroom を作り、便利な検索の仕方などを職員研修において全体に広め、ハンドブックを活用しやすい環境を作った。生徒指導等で行き詰まった時や新たな試みを考える際に、手軽に活用できるツールとして、有効な手段になるのではないかと考えた。

イ 生徒指導担当通信の活用

生徒指導担当通信（以下生担通信）は以前から発行をしており（図2）、教師への連絡ツールとしていたが、今年度はハンドブックに掲載されている生徒指導上における問題の解決方法なども掲載することで、校内での情報共有を図った（図3）。生担通信は教員向けだけでなく、生徒向けも発行し生徒指導に関することだけでなく、生徒の良い行いなども紹介をすることで生徒指導に関する共通理解を図っている。

「先生方のきめ細やかなかわり」とは具体的にどういうことなのか？こういうことは現場で伝え聞いたことなどを手探りでやっているケースが多いかもしれません。
「児童生徒指導ハンドブック2023」のP27に、不登校初期対応が書いてあります。「欠席1日目 電

図3 生徒指導担当通信の拡大

学年	割合
1年生	76.1%
2年生	65.0%
3年生	77.8%

図2 生徒指導担当通信

②ハンドブック第2章「すべての児童生徒が安心できる魅力ある学校づくり」の実践

ア 魅力ある学校づくり p. 8～

ハンドブック第2章には、生徒指導で意識することとして、「特別活動の充実による『集団づくり』『児童生徒が主体的に行う『絆づくり』『授業の工夫・改善による『わかる授業づくり』の3つが示されている。今回の研究において「学校に行きたい」と毎日生徒が思えるようになるための手立てを日ごろから意識できるよう、ハンドブックのデータを印刷し、誰でも見ることが出来る場所に掲示をして、啓発した。

イ 学校生活の約束やルールを考えてみましょう p.10～

主題設定の理由でも述べた「生徒指導をめぐる状況の大きな変化」について、学校生活の約束やルールの見直しは多くの学校の教員間でも話題となっている。本校でも数年前から「なぜこのルールを守らなければいけないのか」「このルールの目的は何か」等、合理的ではないルールや約束について生徒から疑問が上がっていた。そういった声を大事にすることが「学校に行きたい」につながることも考え、生徒と一緒にルールや約束の見直しを行うことで、教職員と生徒との間に乖離が生まれないように共通理解を図っている。

・ルールを変える過程

ルールについて、まず生徒から出た意見を職員会議や年間反省、職員研修などで取り上げ、教職員全体で共通理解を図った。その後、「どうしてそのルールが必要なのか」「本当に変える必要があるのか」などを学級委員や委員長、部長を中心とした生徒協議会等で、生徒と一緒に話し合った。その上で変更点と変更理由を明らかにし、話し合いの過程で出た意見も含め、決定したことを生徒会本部役員から全校生徒に伝え、変更したルールを適用することにした。

・ルール変更について

教職員間での話し合いでは様々な意見があった。すべてが「生徒にとって良い学校にしたい」という教員の思いからくるものだが、教職員の主観ではなく、生徒指導提要にもあるように「子供の発達や教育的ニーズを踏まえつつ、一人一人の可能性を最大限伸ばしていく教育」になっているか、また、その根拠が学校教育目標などに沿っているかなどを、考える良い機会となった。

③ハンドブック第4章「児童生徒との教育相談の充実に向けて」の実践

ア 教育相談の年間計画 p.18～

ハンドブックには「学校における教育相談は、すべての教職員によってあらゆる教育活動の実践の中で行われるものです。」とある。生徒との関係づくり、生徒の状況把握、共感的課題解決など、定期教育相談の期間のみだけでなく、年間を通して計画的に行うものであると思うが、これまで本校ではその時々で要項を出し、その都度説明をしていたが、年間を見通した計画は出していなかった。ハンドブック p.18の「年間計画に位置付けて」を参考に、この機会に本校でも教育相談年間計画を作成し（図4）、年度途中ではあるがクラスルームで全体に周知した。

教育相談 年間計画				
月	主な行事	教育相談	目的	関連教育活動
4	始業式・入学式			
5	体育祭	教育相談1	・新学期の適応確認 ・友人関係の確認	共生＊共育効果測定
6	児童生徒指導点検強化月間			
7		必要に応じて、個別の相談時間を設けます。特に、夏季休業の学習課題の取り組み方への配慮をします。		三者面談
8	夏季休業			
9		教育相談2	・夏休み明けの確認 ・前期のふりかえり ・後期の目標の確認	
10	前期終業・後期始業 八羽祭			
11	かわさき子どもの権利の日			共生＊共育効果測定
12	冬季休業			三者面談
1		教育相談3	・冬休み明けの確認 ・学年のふりかえり ・新年度の不安解消	
2	学校体制振り返り月間			
3	卒業式・修了式			

図4 新しい教育相談年間計画

イ 定期的な教育相談の実際 p. 20～

ハンドブック p. 20 には「定期的な教育相談 実施の流れと留意点」が書かれているが、実際にこの流れの通りに実施できていない現状もある。教育相談の中で何ができていて、何ができていないかを再確認する必要があると感じた。

今回、ハンドブックの留意点を確認した上で、これまでの本校の取組を振り返ると、教育相談の方法の細かいところについて全体共有ができていないことが分かった。そこで改善できそうなことはすぐに行動に移し、教育相談の充実に繋げることができた（表 4）。

表 4 教育相談の取組チェックから一部抜粋

ハンドブックの留意点 (P 20)	本校の取組	改善点
職員会議で教育相談の主旨や実施方法、実施期間等についてCOや生徒指導担当が確認します。	運営委員会や職員会議で教育相談については話をしている。昨年度は年間反省で実施の時期について話し合い、今年度から変更した。	教育相談がはじまるタイミングで、「生担通信」を発行し、職員全体の意識を高めた。
統一した事前アンケートの設問の意味等を確認します。	アンケートについては以前紙媒体で行っていた時は、職員会議の際に確認をしてもらっていたが、GIGA端末で行うことになり、以前とは確認の仕方が個人任せなところもあった。	事前にGIGA端末のクラスルームにアンケートを掲載し、確認をしやすくした。
※アンケート作成のポイント 「はい、いいえ」「AかBか」で答える質問ばかりでなく、「どう思うか？」など、自由に答えさせる設問も入れていきます。	「何かあれば書いてください」という項目はあるが、「どう思うか？」という問いかけは入っていない。検討してみようと思う。	夏休み後のアンケートから、「夏休みの思い出をなんでも良いので書いてください」という項目を自由記述で書いてもらったが、ほとんどの生徒が何かを書いてくれて、それを話題にして会話を膨らますこともできた。

ウ 児童生徒が相談しやすい雰囲気づくり p. 21～

第2学年には「自分の気持ちをはっきり言うことができない」という生徒が多い傾向があるので、教育相談において、生徒が相談しやすい雰囲気を作ることが大切であると感じた。相談の対応の仕方が、系統的な相談となっていない状況も考えられるため、共通理解のためにハンドブック p. 21 の「身につけるべき相談の基本的な手法」を参考にするよう伝えた。また、「児童生徒との教育相談チェックリスト」（川崎市総合教育センター教育相談センター）も活用し、教育相談前のセルフチェックを行った（図 5）。

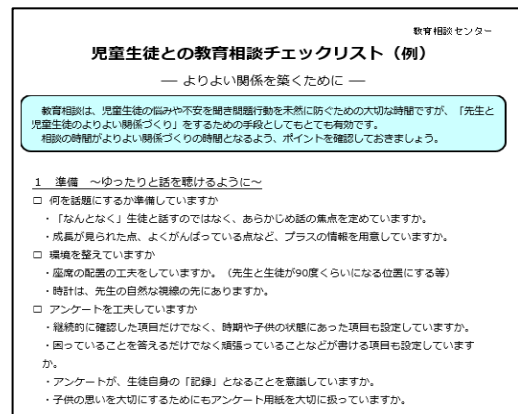


図 5 教員の教育相談チェック

④ハンドブック第13章「子どもたちのSOS」の実践

ア 子どもたちのSOSについて p.79～

「自分の意見や気持ちをはっきり言えない」という本校第2学年の生徒の特徴から、辛いことがあっても自分の中に溜め込んだり、うまく思いを伝えることができなかつたりする生徒が多くいるのではないかと考えられる。生徒を取り巻く今日的な教育課題によって、日常的に困難さや生きづらさを感じている生徒たちを支えるために、SOSを発しやすい環境を整えることが課題の解決につながると思う。

イ SOSの出し方・受け止め方教育 実践例 p.84～

以上のことから、「SOSの出し方・受け止め方教育」を行う必要性を感じ、ハンドブックの実践例を参考に、今年度新たに追加された3種類のSOS教育の教材を共生*共育プログラムの一環で行った。活動を通して、生徒の感想

(図6)には「話すだけでもだいぶ楽になった。」というような感想が多く見られ、この授業自体がSOSを発する良い機会となったと共に、私たち教員も生徒のSOSに気づくことができる良い機会となった。

2. 今日の活動で、感じたことを書きましょう。

- ・ストレスを私たちが、ちゃんとほっとする
- ・ストレス予防できたらなー
- ・みんなと共感できることがあった。こういうことは今までで生きたいぶん楽になった
- ・今後、こういう会があるといいのになと思う。

図6 SOS教育の感想

⑤ハンドブック第14章「児童生徒との良好な関係づくり」の実践

ア ことばの大切さ p.88～

生徒との良好な関係づくりにおいて、教員の言動が大きく影響があることを認識する必要がある。ハンドブックの第2章にもあるように、魅力的な学校づくりのために、まずは教員の意識を広げようと、ハンドブックのデータを元に「先生に言われてうれしい言葉」と「先生に言われて嫌なことば」のチェックを行った。チェックがあることで、いつも以上に「先生に言われてうれしい言葉」を言う機会が増えたのはもちろん、意図せずに言ってしまう「先生に言われて嫌なことば」についても、自覚する良い機会となった(図7)。

	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日
1 よく頑張りました! or よくやった!														
2 よくできました! or いいね!														
3 ありがとう!														
4 すごい! or 素晴らしい!														
5 頑張って! or 頑張れ!														

図7 教員の言葉かけチェック

⑥その他

授業内におけるコミュニケーション活動

本校第2学年の生徒の課題として、効果測定での言語的解決スキルの項目が他の項目より高くないことから、よい取組をしている教科の授業内でのコミュニケーション活動について情報を集めてみた。「確実に答えられる発問で発言のハードルを下げる」「アドバイスタイムを設け自然な会話ができるようにする」など、他教科等でも取り入れることができる授業の工夫を、教職員全体に向けて継続して発信をした。

(3) 学年・生徒と教師の変容

① 学年生徒の変容

ア 定期教育相談事前アンケート（9月）から

教育相談事前アンケート（以下アンケートとする）の結果については、あくまで補助的なものと捉えているが、令和4年度のアンケートの結果が今回の研究につながっているともいえるので、昨年度との違いを見る上でも、結果の分析は必須であると考えた（表5・6）。

表5 教育相談アンケートの結果の推移

教育相談事前アンケート 令和4～5年度の推移(一部抜粋)

	質問	R4 6月	R4 11月	R5 6月	R5 9月
1	学校へ行きたいと日々思う	60.8	48.6	60.3	65.0
4	思っていることを何でも発言できる	70.2	61.2	65.5	71.0
5	学級での話し合いは活発だ	82.6	73.8	74.1	76.1
9	自分の意見や気持ちをはっきり言える	76.0	71.1	74.1	76.1

表6 教育相談アンケート結果の各年度内での上昇度

昨年度6月→9月(11月)と今年度のUP率の比較

	昨年度	今年度
	-12.2	4.7
	-9	5.5
	-8.8	2.0
	-4.9	2.0

単位%

単位%

結果、アンケートを実施した時期に違いはあるものの、気になっていた全ての項目において、昨年度に比べ上昇していることが分かった。特に昨年度大きく下がっていた「学校に行きたいと日々思う」という項目については、4.7%の上昇があったことは、春先からの取組の成果のあらわれではないかと思う。1年を通して継続して取組を行っているので、まだまだ伸びしろがある「自分の意見や気持ちをはっきり言える」という対人関係についての課題は、3年時にはさらに向上させたい。

イ かわさき共生*共育プログラム 効果測定（12月）から

2回目（12月）の効果測定（表7）では、第1回と比較して0.5%以上の変化を上昇・下降とし、0.5%以内だったら横ばいという形で変化を分析した。

表7 令和5年度効果測定 6月と12月の結果分析

	解決言 ス語 キ的 ル			サ ポ ー ト 気 遣 い			感情 統 制			信 頼 他 者			信 頼 自 己		
	6月	12月	UP DOWN	6月	12月	UP DOWN	6月	12月	UP DOWN	6月	12月	UP DOWN	6月	12月	UP DOWN
A	55.1	55.7	↗	56.9	58.1	↗	61.9	65.5	↗	54.8	57.8	↗	59.4	59.1	→
B	52.8	50.7	↘	53.9	52	↘	60.3	61.6	↗	55.7	54.3	↘	54.2	54.3	→
C	52.8	51.3	↘	56.4	56	→	64.9	65.1	→	57.3	55.2	↘	56.5	54.8	↘
D	53.4	54.6	↗	57	57.5	→	64.8	65.2	→	55.1	55.3	→	56.5	56.2	→
平均値	53.5	53.1	→	56.1	55.9	→	63.0	64.4	↗	55.7	55.7	→	56.7	56.1	↘
昨年度	53.0	52.9	→	54.9	53.6	↘	62.3	62.9	↗	54.8	53.7	↘	56.0	54.0	↘

単位%

結果、どの項目も大きく上昇することはなかったが、昨年度の結果と比べると良化が見られた。また、データを分析して興味深かったのが、クラスによって変化に特徴があったところである。Aのクラスは5項目中4項目で上昇をしているが、今回実践した取組の中で、「言葉かけチェック」においても、Aのクラスの担任は1日で20回近く「先生に言われてうれしい言葉」を使っていたので、生徒に寄り添い、頻繁に声掛けをする普段からの取組が、結果につながっていると考えることができる。

②学年の教員の変容や効果

今回、定期教育相談事前アンケートと効果測定で生徒の変容を見たが、一番の目的は生徒の課題解決の為に教員がどう動くようになったか、という教師の変容を見取ることであった。「1年間の取組で意識が変わったことは」「1年間の取組で反省はありますか」という教員向けアンケートをとったところ、以下のような回答があった（表8）。

表8 1年間の取組のアンケートから一部抜粋

意識が変わったこと	1年間の取組での反省
<ul style="list-style-type: none"> ・言葉かけを日常的に意識するようになって、言葉がどう伝わるかについて自分を振り返る良い機会になった。 ・生徒との関わりについて、以前よりも寄り添うことを意識して行動ができた。 ・教育相談アンケートや、効果測定の結果をデータ分析してくれたおかげで目標を持って日々の指導ができた。 ・教育相談アンケートの結果をすぐに一覧で見ることができたので、情報共有を速やかに行うようになった。 ・SOS教育をしたおかげで、生徒同士がSOSを出しやすい雰囲気になったし、SOSに気づける良い機会にもなった。 ・教職員で生徒指導についての考えを話す機会が多くあり、協力しやすくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校のルールの中で、分からないことがあったが、生担通信で伝えられていたにも関わらず、よく読んでいなくて生徒に正しいことを伝えることができなかった。 ・声掛けや寄り添いが他クラスに比べて少ないからか、効果測定でも良い結果を出すことができなかった。 ・ハンドブックは、促された時にはとても有意義に活用できたが、その他の時間で自主的に使うことがあまりできなかった。 ・SOS教育をやってみると、助けてもらいたくても言えない生徒や、我々の気づかないようなストレスを抱えていることが分かったので、もっと早くやっていたら良かった。 ・頭では理解していても、生徒に良くなってほしいという気持ちが先走ることがあった。

アンケートの結果を見ると、今回の取組がなかったら気づくことができなかったことがあったり、普段の取組を振り返るきっかけとなったりと、効果は様々であった。また、日常的に生徒指導を話題とすることで、生徒のことだけでなく、教職員の相互理解につながり、学年全体で課題を明確にし、方向性を定めて生徒指導ができるようになったことは大きな成果だと考えられる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

この研究を通して、目的であった「生徒が学校に毎日楽しく通えるために、私たち教員が日常的な生徒との関わりの中で実践できることを探り、共有し、生徒への関わり方を見直すきっかけとしたい。こうした目標の実現のために、日常的に、繰り返し、課題が見えるたびにハンドブックを活用」して

いくことについては、実践の内容の通り、おおむね達成できたのではないかと。今回ハンドブックの各章を実践していきながら、研究の過程においてハンドブック以外で学んだ多くのことも併せて伝えることができたことも、私たち教職員の意識の変容に良い効果があった。例えば、ハンドブック第14章の「ことばの大切さ」をきっかけに、もう少し詳しく実践について知りたいと考え手に取った『月刊学校教育相談 2023年10月号⁴』にある「子どもを『注意』するときの工夫」からも、言い換える言葉を紹介することができ、それが改善策につながった例もあった。

ハンドブックの内容を確認していく中で、新しい知識を身に付けられるだけでなく、視野が広がり、今まで学んできたことが改めて意味づけされたり、もう少し学んでみたいという意欲につながったり、教職員も主体的に物事を考えるきっかけになったことから、活用は大きな意義があったと考える。

2 今後の課題

今回の実践は、「誰でもできるものを、誰でも持っているハンドブックを使用して行う」ということをイメージして半年間行ってきた。どのような学校でも、学年によって生徒の特色は違うが、学校全体で向かう方向性は変わらず、3年間を見通した取組になることが望ましい。

今後は、今回の研究で構築した体制を維持するために、継続してアンケートや効果測定で生徒の状況を把握し、その結果に基づき適切な生徒理解に基づいた生徒指導を行うためにも、引き続きハンドブック共通の話題として活用し、学年にとどまらず、学校全体で実践できるようにしていきたい。そのために、年度当初の生徒指導研修会などから、本校の生徒指導確認事項の中にハンドブックの内容を盛り込んで、オリエンテーションを充実したものにしていきたい。

また、本校の課題として1年間を通して2学年の生徒の「言語的解決スキル」の向上には課題が残った。これに関しては来年度も共生*共育プログラムの実施や、継続したSOS教育を行うと共に、生徒のアセスメントに基づいてハンドブックを効果的に活用するなど、今年度とは違うアプローチも考えていきたい。

最後に、このような貴重な研究の機会を与えてくださいましたことに感謝を申しあげるとともに、適切なお指導とご助言をいただきました川崎市総合教育センターの皆様、及び勤務校の竹内和則校長先生をはじめ、教職員の皆様には心より感謝し、厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

岡田守弘『教師のための学校教育相談学』ナカニシヤ出版	2013年
河村茂雄他『Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド』図書文化	2013年
宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』新潮新書	2019年
学校教育相談研究所『月刊学校教育相談』ほんの森出版株式会社	2023年

【指導助言者】

川崎市総合教育センター指導主事	荒谷 健一
-----------------	-------

⁴ 学校教育相談研究所『月刊学校教育相談』ほんの森出版株式会社 2023年 pp. 10-18